

右室梗塞に対するQuantitative blood pool SPECTの使用経験

新井 芳行,^{*} 伊藤 英樹,^{*} 水野 清雄,^{*} 大里 和雄^{**}
村上 達明,^{*} 守内 郁夫,^{*} 小門 宏,^{*} 藤田伸一郎^{**}
白崎 温久,^{*} 荒川健一郎,^{*} 高橋 美文,^{*} 大中 正光^{**}
柴田 英和 ^{**}

今回我々は心電図同期心プールSPECTデータより左右両心室の壁運動及び容積を解析するアプリケーションであるQuantitative blood pool SPECT (QBS) により右室梗塞時の右室の壁運動及び容積をフォローできた症例を経験したので報告する。

【症例】

45歳、女性。平成13年1月7日、午後9時階段昇降時に胸痛を認めた。近医を受診し心電図上II III aVF誘導のST上昇を認めた。心筋梗塞加療のため、当院へ紹介された。搬送中sinus arrestとなり心拍数は40台であった。緊急冠動脈造影検査上右冠動脈

近位部の完全閉塞を認め(図1)、同部位に対して経皮的冠動脈形成術を施行した。

冠危険因子：糖尿病

急性期のQBS上右室容量はESV/EDV：135/91mlと拡大し、壁運動も低下していた(図2)がフォロー時にはESV/EDV：98/69 mlと右室容量は縮小し、壁運動も若干改善を認めた(図3)。

【結語】

QBSにより右室梗塞合併時の右室機能の経過を観察し得た症例を経験した。

^{*}福井循環器病院 循環器科

^{**} 同 放射線部

